「白銀のひかり」栽培マニュアル ver.2.0



成熟期前の「白銀のひかり」（令和７年８月 27 日　九戸村長興寺）

令和８年３月

岩手県

目　　次

Ⅰ　はじめに……1

Ⅱ　「白銀のひかり」の品種特性……2
　1　育成経過……2
　2　品種の特徴……2
　3　栽培適地……3

Ⅲ　栽培管理……4
　1　ほ場選定……5
　2　育　　苗……5
　3　ほ場の準備……11
　4　基　　肥……11
　5　耕起・代かき……12
　6　田 植 え……12
　7　水 管 理……13
　8　追肥（穂肥）……17
　9　雑草・病害虫防除……17
　10　収穫・調製……17
　11　秋耕・土づくり……18
　12　異品種混入防止対策……18

Ⅰ　はじめに

「白銀のひかり」は、岩手県農業研究センターで平成 26 年に交配し、約 10 年を費やして完成した品種で、「金色の風」「銀河のしずく」に続く県オリジナル水稲新品種として、令和７年から本格生産を開始しました。

本県では、持続可能な高品質・良食味米の安定生産と地域・世代を超えた認知度向上、多様なニーズに対応した生産・販売及び消費拡大による「全国トップクラスの米産地としての地位の確立」に向けた取組を進めており、「白銀のひかり」については、「いわてっこ」に代わる県北地域向け新品種として、生産拡大を目指しています。

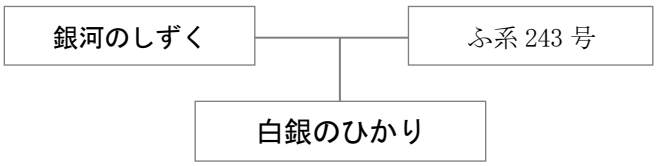
このため、「白銀のひかり」の生産にあたっては、栽培適地において、技術を有する生産者が必要な栽培管理を徹底し、品種の特長を引き出すとともに、高品質・良食味な「白銀のひかり」を消費者の皆様に提供していくことが重要です。

このマニュアルは、「白銀のひかり」の特性や、栽培管理のポイント・留意点をまとめていますので、基本管理を徹底しつつ、地域や生産者の実情等に応じた技術の研さんや、最適化を図り、更なる良質米の安定生産につなげていただければ幸いです。

Ⅱ　「白銀のひかり」の品種特性

１　育成経過

「**白銀のひかり**」（旧系統名「岩手 141 号」）は、「岩手 107 号（**銀河のしずく**）」を母、「ふ系 243 号」を父として平成 26 年に人工交配を行い、選抜・固定。



２　品種の特徴

・**米飯の外観は「銀河のしずく」並みに優れ**、「いわてっこ」並みの**良食味**

・稈長は「いわてっこ」より短く、**耐倒伏性はやや優る**

・「いわてっこ」より穂数は少なく、**１穂籾数は多い**

・「いわてっこ」より**玄米千粒重が大きくやや多収**

（１）出穂期・成熟期

出穂期は「いわてっこ」並み～やや早く、成熟期は並みの**「早生の中」。**

（２）食味

米飯の外観は「銀河のしずく」並みに優れ、「いわてっこ」並みの**良食味**。

（３）耐冷性

障害型耐冷性のランクは「強」であり、「いわてっこ」並みに優れる。

（４）耐病性（いもち病）

葉いもち抵抗性のランクは「極強」、穂いもち抵抗性は「やや強」。

（５）耐倒伏性

「いわてっこ」と比較して、**稈長は短く、耐倒伏性はやや優る**（写真１）。

（６）収量

・「いわてっこ」と比較して、穂数は少なく、**１穂籾数は多い**。

・玄米の粒厚は 2.2 ㎜以上の割合が高く、**玄米千粒重は大きくやや多収**。

（７）その他

芒（のげ）は少なく短い（写真２）。



写真１　「白銀のひかり」（左）と「いわてっこ」（右）の稲

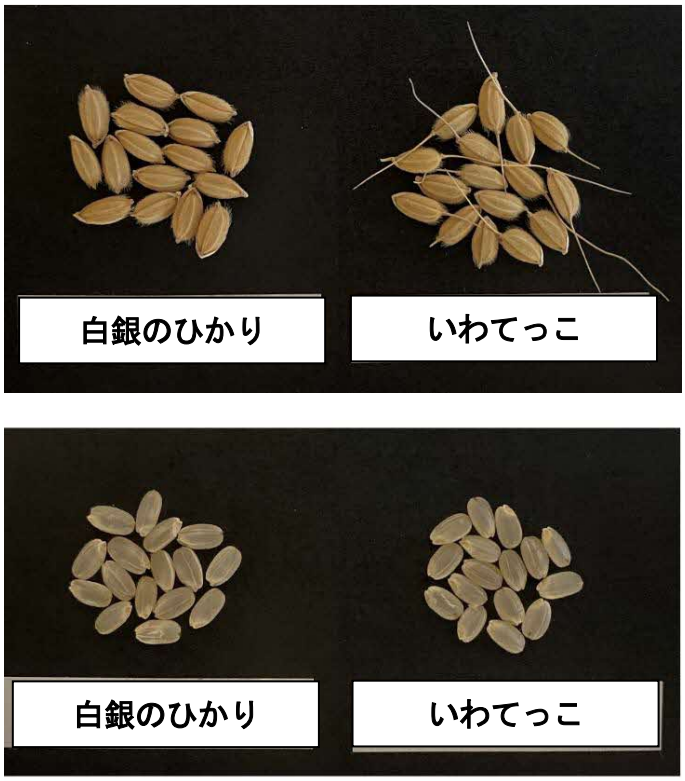


写真２　「白銀のひかり」と「いわてっこ」の籾と玄米

表１　収量・収量構成要素（Ｒ６生育診断圃平均値※）

品種名	㎡穂数（本）	一穂籾数（粒/穂）	㎡籾数（千粒）	精玄米重（kg/10a）	千粒重（ｇ）
白銀のひかり	**390**	**76.1**	**29.8**	**620**	**24.1**
いわてっこ	441	65.8	29.0	582	22.6
比	88%	118%	103%	107%	106%

※生育診断圃は雫石町、岩手町、西和賀町、遠野市、洋野町、二戸市の６地点

３　栽培適地

県北部・沿岸北部の全域及び県中部・沿岸南部の標高 240m以上

- **適地外**では収量や品質が不安定になるので**栽培しない。**
- 作付けを予定しているほ場が、上記の栽培適地に該当するか否かについては、**最寄りの市町村農政主務担当課または県広域振興局・農林振興センターに確認**する。

Ⅲ　栽培管理

「白銀のひかり」栽培のポイント

①　適地・適作期

適地外での作付けや、極端な早植・遅植はしない。

- 出穂早過ぎ・・・高温登熟による白未熟粒・胴割
- 〃　遅過ぎ・・・低温での充実不足・屑米の増加

②　健苗育成

徒長しやすいので注意、きめ細かな温度管理を！

健苗育成で早期活着・分げつ促進

③　適正栽植本数

穂数が少ない品種、適正な栽植密度で初期生育確保を！

- 坪 60 株（株間 18cm）～70 株（同 16cm）
- 植付本数　４～５本/株

④　追　肥

追肥は幼穂形成期～減数分裂期に、生育と葉色をよくみて判断

目安は窒素成分で２kg/10a

⑤　適期刈取

穂が止葉で見えにくいので、手にとって判断

黄化籾 80～90％で刈り取り。刈遅れは胴割の原因

☑：管理内容を自己チェック！

１　ほ場選定

□　**栽培適地内にあるか確認**

□　**強湿田や水もちの悪いほ場、復元田（特に転換初年目）は避ける。**

⇒　生育の安定化、雑草対策、倒伏対策を意識してほ場を選ぶ。

２　育苗

（１）作業前の準備

ア　田植日の設定

□　**５月中旬～下旬**

⇒　地域慣行の「いわてっこ」に準じた移植時期とする。

イ　播種計画

□　田植の予定日から育苗期間（稚苗：20～25 日、中苗：30～35 日）を逆算して播種計画をたてる。

ウ　作業前の準備

□　病害や混種事故防止のため、**機材や施設を清掃・洗浄**する。

□　**育苗施設付近に籾殻・稲わらを置かない**（いもち病対策）。

□　催芽機・育苗器の温度が、設定と合っているか点検する。

□　播種機の調量設定（播種量・床土や覆土の量・薬剤量）を確認する。

□　ハウス置き床・育苗プールの均平を確認。

（２）種子消毒

□　消毒薬剤の使用法に準拠する。消毒済み種子の場合は、そのまま浸種する。

□　**水温は 12～15℃を確保**する。

⇒　出芽不揃いの原因となるので **10℃未満の低温浸種は避ける**。
（水温が低い場合は、あらかじめ、足し湯等で 15℃程度に調整してから浸漬する）

（３）浸種

□　**浸種水温は 12～15℃、浸種期間７～10 日**とする。

⇒　出芽不揃いの原因となるので **10℃未満の低温浸種、長期間の浸種は避ける**。（水温が低い場合は、あらかじめ、足し湯等で 15℃程度に調整してから浸種する）

※　「いわてっこ」より発芽が早い場合があるので注意

※（２）（３）共通

浸種後 24 時間の水温（１日目の水温）が低いと、その後、十分な水温を確保しても出芽揃いが悪くなるので、浸種開始時の水温には特に注意する（図１）。

			
１日目水温	**13℃**	**５℃**	**５℃**
2～10 日目水温	13℃	13℃	５℃
出芽率	87%	53%	１%

図１　浸種時の水温条件と出芽・苗立ち（加温出芽、播種６日後）（岩手農研 H19）

（４）催芽

□　**30℃を厳守**する。循環式催芽機を用いる場合は、循環水が種子に触れないようにする（図２：細菌病対策のため）。

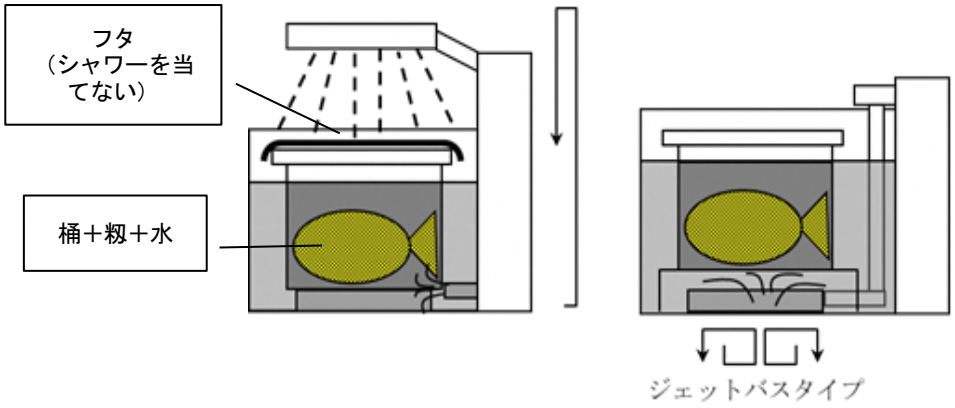


図２　循環式催芽機の活用事例

（５）播種～出芽～ハウス展開

□　苗質・育苗期間に応じた播種量設定とする（表２）

□　培土の使用量は、床土２cm・覆土 0.5cm 程度を目安とする。

□　**加温出芽**とし、**30℃を厳守**する（細菌病対策）。

・　出芽長の目安は、稚苗１cm、中苗 0.5cm である（図３）。

・　出芽したらハウス展開を行う。１品種１ハウスが望ましい。

表２ 苗の種類と播種量の目安

種類	播種量 (g/箱、乾籾)	育苗日数 (日)	葉齢 (葉)	草丈 (cm)	乾物重 (g/100本)
稚 苗	150～180	20～25	2.0～2.5	12～14	1.0～1.5
中 苗	100～120	30～35	3.5～4.0	13～15	2.0～2.5
成 苗	80以下	35～40	4.5～5.5	15～18	2.5～2.8

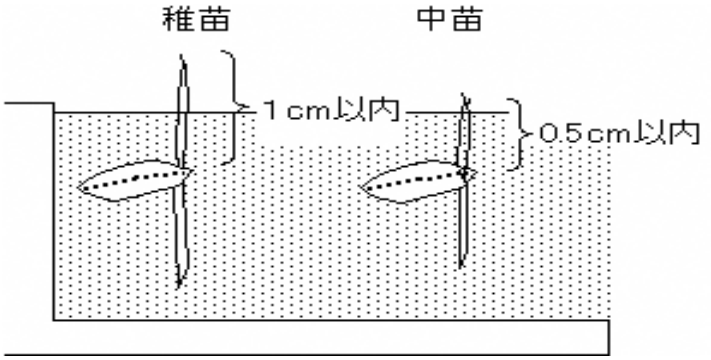


図３　出芽長の目安

（６）ハウス展開後の育苗管理

ア　慣行育苗のかん水

□　**基本的に朝１回**（９時ごろまでに）、床土に水が十分に浸透する程度とする。

□　育苗の後半は乾きやすくなるので、かん水量を増やす。
乾き過ぎなどにより**夕方のかん水**が必要となる場合は、**しおれ防止程度**にとどめる。

イ　プール育苗の水管理（図４）

□　**１回目の水入れは緑化終了から２～３日以内**に行う（細菌病対策）。
このときの水深は、苗箱の培土表面より下の位置とする。

□　**２葉目が出始めたら、培土表面が隠れる程度の水位**を確保する。

□　水温が 30℃を超えたら、新しい水と入れ替えて温度を下げる。

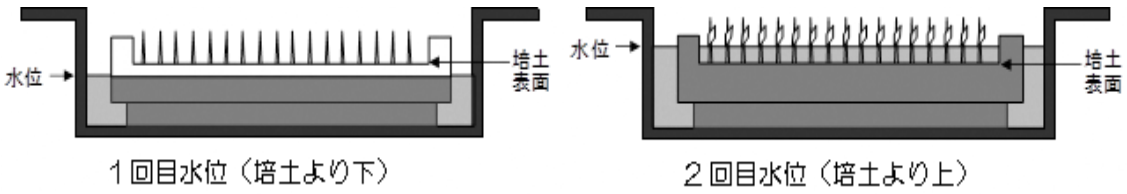


図４　プール育苗の水管理

ウ　温度管理（図５、６…慣行育苗・プール育苗共通）

□　**温度計を設置**する。

- ハウスの中央付近に設置する。
- 気温…地面から30㎝以内の高さに吊るす、又は立てる（写真３）。
- 水温…プール育苗では必ずチェックする。

□　低温や荒天の日以外は、**徐々に外気に慣らしていく管理**とする。

□　**５℃以下の低温**が予想される場合は**ハウスを閉め、保温**する。

□　**晴天時は朝の気温上昇に注意**し、早めにハウスの換気をおこなう。



写真３　温度計の設置

エ　育苗期の追肥（慣行育苗・プール育苗共通）

□　生育中に葉色がさめてきた場合や、病気で生育が衰えている場合に行う。

- 時　　期…稚苗で1.5～２葉期以降、中苗は２～2.5葉期以降とする。
- 施用方法

①　箱あたり窒素成分１g（硫安であれば現物５g）を水１～1.5Lに溶かし、ジョウロ等で散布する。　⇒　葉が乾いた状態で散布すること。

②　散布後は葉焼け防止のため、水を散布して葉の肥料分を洗い流す。

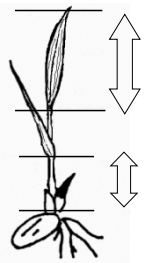
苗の生育			(3日) 	(10日) 	(15日) 	(20日)  第二葉身長 第一葉鞘長
温度	30℃	28～30℃			
	25℃		日中20～25℃	日中　20～25℃	
	20℃		夜間15～20℃		
	15℃			夜間　10～15℃	
	10℃				
生育の時　期		出芽期	緑化期	硬化期	
経過日数		2～2.5日	３～５日	10～15日	

図５　稚苗の温度管理

			(5日) 	(15日) 	(30日) 	(40日) 
温度	30℃	28～30℃				
	25℃		日中20～25℃			
	20℃				日中15～20℃	
	15℃					
	10℃					
	5℃		夜間5～10℃			
生育の時　期		出芽期	(緑　化)　硬化前期		硬化後期	
			出芽揃～1.5葉	２～3.5葉	3.5～４葉	
経過日数		1.5～2日	(3～4日)　15～20日		10～15日	

図６　中苗の温度管理

（７）育苗管理上の留意点

- **「白銀のひかり」**は、**苗が徒長しやすい**品種である（写真４、表３）。
  徒長苗や老化した苗、葉色のさめた苗は、活着の遅れや欠株につながり、その後の生育にも支障をきたす。
- このため、**かん水・温度管理には特に注意**をはらい、また、**移植適期の葉齢に達したら、遅れずに移植**することが大切である。
- なお、「白銀のひかり」は「いわてっこ」に比べ葉色が薄いため、育苗期の追肥の判断は十分注意する。

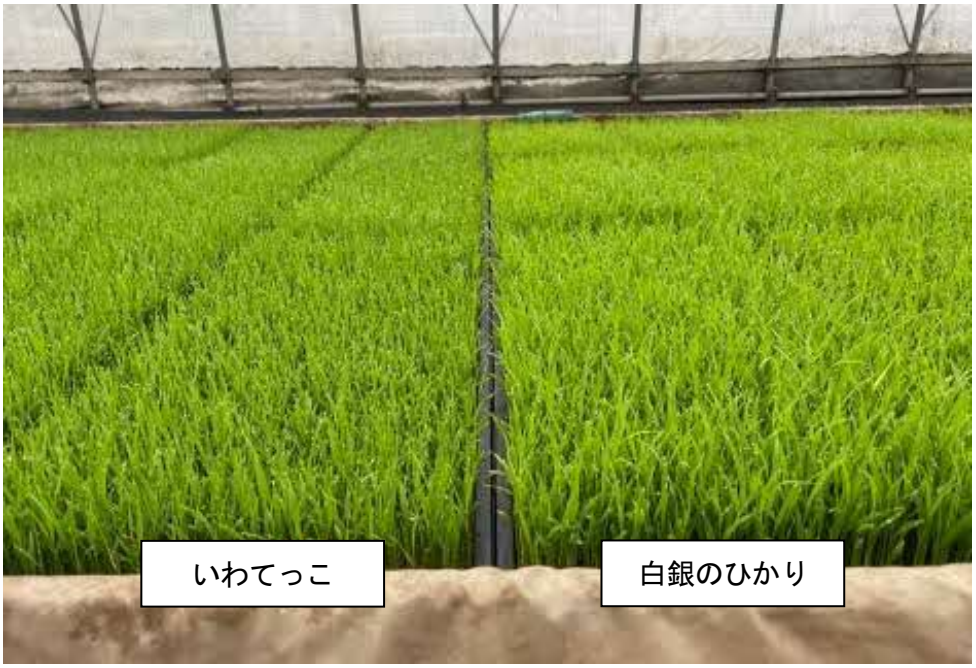


写真４　育苗期の様子（令和６年４月 30 日、軽米町）

表３　苗調査結果（Ｒ６生育診断圃平均値※）

品種名	播種期 （月日）	移植期 （月日）	草丈 （cm）	葉数 （葉）	第１ 葉鞘長 （cm）	充実度 （mg/cm）
白銀のひかり	**4/19**	**5/18**	**19.0**	**3.0**	**4.4**	**1.21**
いわてっこ	4/18	5/18	17.9	3.0	3.9	1.27
差・比	－	－	+1.1	±0.0	+0.5	95%

※生育診断圃は表１と同じ６地点、播種量は 120～170g/箱

３　ほ場の準備

（１）畦畔や農業用排水路等の点検・補修

□　**畦畔や水尻の補修（あぜ塗り等）**

⇒　幼穂形成期や減数分裂期など、イネが低温に弱い時期に深水管理できるよう準備しておく。

⇒　漏水防止は、薬剤・肥料の効果を高め、用水の浪費防止につながる。

（２）土づくり

□　有機物は、窒素成分を勘案して適正量を施用する（表４）。

□　**ケイ酸資材の投入**⇒受光態勢の改善により食味の向上が期待される。

表４　【参考】水稲における牛ふんたい肥１ｔ相当の施用量　　（ｔ/10a）

稲わらたい肥	牛ふんたい肥	豚ぷんたい肥	発酵鶏ふんたい肥	稲わら
1～1.5	1.0	0.28	0.32	0.5～0.6

※牛ふんたい肥1.0ｔ/10a相当量として計算

４　基肥

（１）基肥＋穂肥の分施体系の場合

□　**地域慣行「いわてっこ」並を基本**に地力等を考慮し加減する。

・　**10ａ当たり窒素成分６kg（全面全層施肥の場合）**を基準とする。

・　**側条施肥**の場合は、**表５を参考に減肥**する。

表５　側条施肥の基準

地帯	主な土壌条件	基肥窒素施肥量
県北部	多湿黒ボク土(中粗粒～礫質)、黒ボクグライ土、灰色台地土、グライ台地土、褐色低地土(中粗粒～礫質)、灰色低地土(礫質)、黄色土	基準基肥量の窒素成分の100%
	その他の土壌	基準基肥量の窒素成分の80～90%
県中南部	黒ボクグライ土、褐色低地土、灰色低地土、グライ土、黒泥土	基準基肥量の窒素成分の70～80%
	多湿黒ボク土、灰色台地土、グライ台地土、黄色土	基準基肥量の窒素成分の100%

（２）肥効調節型肥料を使用する場合（穂肥省略型）

□　**基肥＋穂肥の合計窒素成分量**を、**表６を参考に減肥して施肥**する。

□　**追肥は原則として行わない**（極端な生育不足の場合を除く）。

表６　肥効調節型肥料による全量基肥一回施肥の基準（全面全層施肥）

主　要　土　壌	基肥窒素施肥量
黄色土	(基準基肥+追肥量) 相当量
黒ボクグライ土、灰色台地土、グライ台地土 褐色低地土、灰色低地土、グライ土、黒泥土	(基準基肥+追肥量) の80～90%
多湿黒ボク土	(基準基肥+追肥量) の70～90%

５　耕起・代かき

（１）耕起

□　耕深は、**15cm 以上を確保**

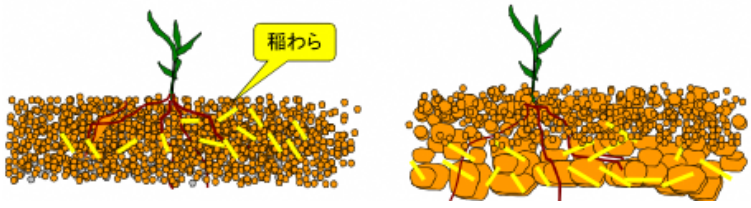
⇒　深耕によって、水稲の根域が拡大し、根の活力が後半まで維持され、気候変動への抵抗力が高まる（高温登熟による白未熟粒の抑制など）。

（２）代かき

□　**残渣（わら、マイクロプラスチック等）の浮き上がり・流出をおさえる**ため、**土面が７～８割見える状態から作業**する。

⇒　**練りすぎに注意**する（図７）。

□　田面に凸凹がある場合は、低い部分に土を引いて**均平する。**
（大区画水田では、レーザレベラによる均平が望ましい）



練りすぎの状態　　**適切な状態**

⇒　排水性の低下（還元，表層剥離 etc.）　⇒　根圏が確保されている

図７　適切な代かきの状態

６　田植え

（１）田植日

□　**５月中旬～下旬**

⇒　地域慣行の「いわてっこ」に準じた移植時期とする。

□　田植え作業は寒い日や風雨の日を避け、**できるだけ暖かい日に行う。**

⇒　苗活着は、水温 16～30℃の範囲で、高いほど促進される。

□　**極端な早植え、遅植え**は品質が不安定になるので**行わない。**

（２）栽植様式

□　**栽植密度**は、**60～70 株/坪**（18.5～20.8 株/㎡）とする。

□　**植付本数**は、**４～５本/株**（80～90 本/㎡）とする。

□　**植付深**は、**稚苗２～３cm 程度、中苗３～４cm** 程度とする。

７　水管理

（１）分げつの促進

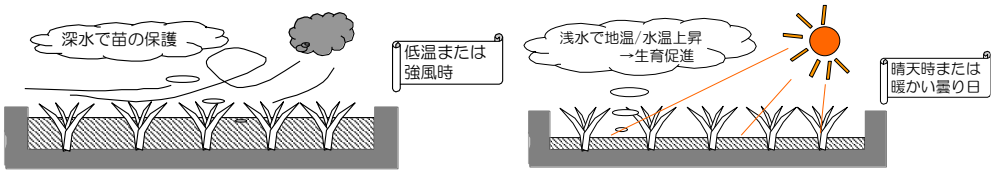
□　**晴れ～曇天の日、気温の高い日**は田面が露出しない程度の**浅水（３～５㎝）**、最高気温が15℃以下の**低温時**は、**葉先が出る程度の深水**とする（図８）。
⇒特に田植直後は活着･初期生育を促すためきめ細かな水管理を行う。

□　**昼間止水・朝夕かんがい**により、生育を促進する。

□　以下のような場合は、稲を健全に保つため、適宜**水の入れ替え**を行う。

・　藻類が多発する水田
・　水持ちが良すぎる場合（１回の入水で７日以上持つ水田）
・　生わら施用田など、早期に還元化が進んでガスが発生する水田（表７）

【生育を進めるとともに保護をする水管理】



【昼間止水、朝夕かんがいによる生育促進】

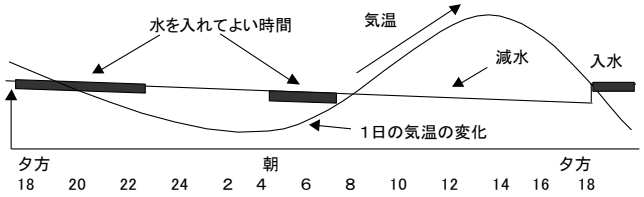


図８　初期生育を促す水管理

表７　異常還元によるガス湧きの程度と対策（久保田1982ほか）

特　徴	生育への影響	対　策	
		分げつ初期	分げつ盛期
足を踏み入れても気泡が発生しない	なし	―	―
足を踏み込んだときに、多量の気泡が発生する	根の活力低下	水の入替	水の入替
晴天時自然に気泡を発生し、パチパチ音がする。歩くと著しい量の気泡が発生する（水田から離れてもドブ臭がする）	根の伸長阻害 地上部黄化	夜間落水	間断灌漑 夜間落水

（２）中干し

□ **茎数が目標穂数の８～９割（茎数 340～360 本/㎡、栽植密度 60 株/坪で 20 本/株前後）**になったら**中干し**を開始する。

⇒ ７月に入ると梅雨で田面が乾き難い場合が多いため、**６月 25 日頃までには中干しを開始**できるよう、**初期生育の確保**に努める。

□ **細かい亀裂が生じ、軽く踏んで足跡が付く程度までほ場を乾かす**（写真５）。落水を促し、中干しの効果を高めるため、**溝切り**をおこなう（写真６）。

□ 特に下記のほ場では倒伏防止のため、中干しを強く行う。

・水保ちの良い水田	・粘土質や有機質の多い水田
・地力が高い水田	・過繁茂で葉色の濃い水田

※ 穂数が少ない品種なので、茎数が少ないなど生育が遅れている場合は強度の中干しを避ける。

□ **中干し終了直後は差し水⇒間断潅漑に移行し、幼穂形成期までに常時湛水**とする。

⇒ 根腐れ防止のため、中干し後の急な湛水は厳禁

【中干しの目的】

〇生育制御

稲体の窒素吸収を一時的に抑制することで、余剰分げつの発生・下位節間の伸長を抑える。

⇒ **稈長の抑制、穂数・籾数の制御（収量・品質の安定化）**

〇根の健全化

還元状態の土壌に酸素を供給することで、硫化水素・有機酸等の有害物質の発生を抑えるとともに、根の活力低下を防ぎ、根を深く伸ばして後期の養分吸収・登熟を良好にする。

〇地耐力確保

コンバインによる収穫作業を効率的・効果的に行うため、田面を固くする。

〇温室効果ガス（メタンガス）抑制

土壌を酸化的な状態とし、メタン生成菌（嫌気性菌）の活動を抑制する。

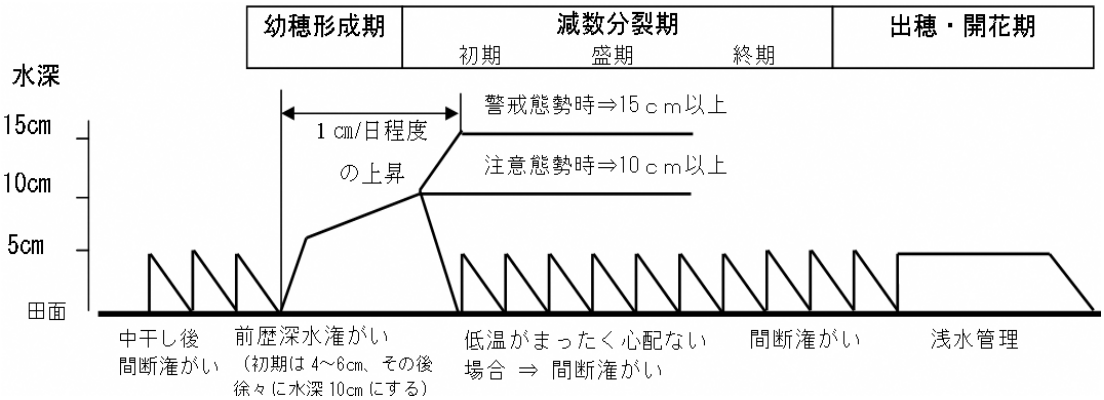


写真５　中干し程度
（軽く踏んで足跡がつく）



写真６　溝切り

（３）低温対策の水管理（目安：７月中旬～下旬）



品種名	幼穂形成期	減数分裂盛期	出穂盛期
白銀のひかり	７/５	７/18	７/27
いわてっこ	７/６	７/19	７/29

図９　中干し後の水管理の模式図

※生育ステージはR6生育診断圃（表１と同じ６地点）の平均値

□　**前歴深水かんがい（幼穂形成期前後、図９、図10）**

幼穂形成期の数日前から徐々に水位を上げ、**幼穂形成期に４～６㎝**にする。

⇒　目的：幼穂の保護、減数分裂期の深水管理に備え水深・水温を確保する。

□　**深水かんがい（減数分裂期前後、図９、図11）**

⇒　減数分裂期に**低温が予想される場合は、10㎝以上の水位**を確保する。

特に17℃以下の強い低温が見込まれる場合は、15㎝以上の深水とする。

□　平年並み～**高めの気温が予想されるときは、間断かんがい**とする。

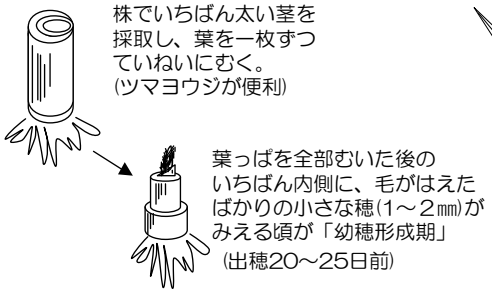


図10　幼穂形成期の確認

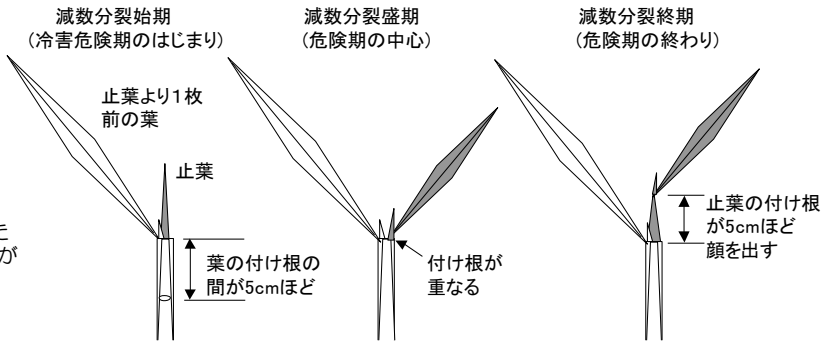


図11　減数分裂期の確認

（４）出穂・開花期以降の水管理（目安：８月上旬以降）

□　**出穂・開花期は、浅水で管理**する。

⇒　過度の乾燥は稲体内の水分生理の乱れにつながり、その後の開花受精にも影響するので、水分補給を重視した管理とする。

□　**開花終了後は、間断かんがい**を基本とする。

⇒　出穂後 20 日間は３～４日湛水・１～２日落水とし、その後は徐々に湛水期間を短く、落水期間は長くしていく管理とする。

⇒　湛水時は水深３cm 程度、落水時は滞水部が消失し、土の湿り気を目視及び触れて確認できる程度までとする。

登熟前半に高温（出穂後 20 日頃まで、日最高 30℃・日最低 23℃以上）が続くと予想される場合

【かんがい水を確保できる場合】

□　**間断かんがいを基本とし、水の入替頻度を高めて、水温・地温を下げる**とともに、根に酸素を与えて活力維持をはかる。

⇒　湛水２～３日→落水１～２日程度とするなど、水の入替頻度を高める。

⇒　入水は夜間に行い、水尻を止めて夕方から朝まで入水し、その後、自然減水とする。

⇒　常時湛水管理は、根腐れや稲体の消耗を招き、スムーズな登熟を阻害するので避ける。

【十分なかんがい水を確保できない場合】

□　間断かんがいが実施できない場合は、**土壌を常に湿潤状態（足跡に水が少したまる程度の状態）に保つ**（写真７）。

⇒土壌の乾燥は品質低下につながるため、実施には十分に注意する。
（水持ちの悪いほ場などは特に注意）



写真７　土壌の湿潤状態

※　かけ流しかんがいの実施は控え、地域全体に水が行きわたるよう、節水に努める。

□　**完全落水の目安は、出穂後 30～35 日**

⇒　早すぎる落水・過乾燥は、根の活性低下や茎葉の枯上りなどを招き、玄米品質の低下（白未熟粒・胴割粒の増加等）につながる。

⇒　機械作業に必要な地耐力を確保しつつ、土壌水分が確保されるよう、きめ細かな水管理に努める。

※　高温により登熟が早まる場合は、落水時期を早め、適期刈取りに備える。

８　追肥（穂肥）

□　**穂肥の時期は、幼穂形成期～減数分裂期**とし、施肥量は**窒素成分で２kg/10a を目安**とする。

□　肥効調節型肥料を利用した穂肥省略体系では、基本的には追肥は不要である。

⇒　極端に生育が不足する場合は、それまでの気象や生育経過、土壌条件や過去の生育状況等を勘案して判断する。

９　雑草・病害虫防除

□　雑草防除・斑点米カメムシ類は、地域の慣行防除体系を参考に実施する。

□　**葉いもち防除は、育苗箱施用剤等による防除を必ず実施**する。

□　**穂いもち防除は、出穂直前と穂揃い期の２回の茎葉散布、又は穂いもち対象の予防粒剤の施用を基本とする。**

⇒　気象条件（冷害気象など）によっては、穂いもちが多発する場合があるので、県病害虫防除所の発生予察情報に注意する。

10　収穫・調製

□　**刈取りの目安は、黄化籾割合 80～90%。**　⇒　出穂後積算気温 950℃～1,050℃。

⇒　刈遅れると、品質及び食味の低下を招くので、**必ず適期に収穫**する。

□　**籾の黄化割合は、実際に穂を手に取って判断**する。

⇒　穂が直立した止葉に隠れる（穂の位置が低い）ので、遠目には緑色が濃く見え、実際よりも黄化が進んでいないものと錯覚しやすい（写真８）。

□　最終的な刈取りの判断の際は、**テスト籾摺り**を実施する。

□　水分 15%、1.9ｍｍグレーダーで仕上げる。



写真８　登熟期の様子（令和６年８月 22 日、洋野町阿子木）

「白銀のひかり」は「いわてっこ」よりも止葉が長く、穂が見えにくい。

11　秋耕・土づくり

□　**稲わらをすき込む場合は、ほ場の排水を確保し、秋の早い時期に行う。**

⇒　排水の悪いほ場では、暗きょや補助暗きょを施工するなどの対策も講じる

□　**堆肥や土壌改良資材（わら腐熟促進剤）等の施用**により、地力増進と土壌の物理性改善をはかり、次年度の作付けにそなえる。

12　異品種混入防止対策

□　**機械や施設の点検・清掃の徹底**

⇒　コンバイン、運搬機、乾燥機や籾摺機など収穫・乾燥・調製機械や施設内には前年の籾等が残留している可能性があるので、これらの機械や施設の点検・清掃を十分に行い、異品種の混入を未然に防止する。

□　**品種切り替え時の異品種混入防止**

⇒　図 12 の作業フローを参考に、異品種混入防止対策を徹底すること。

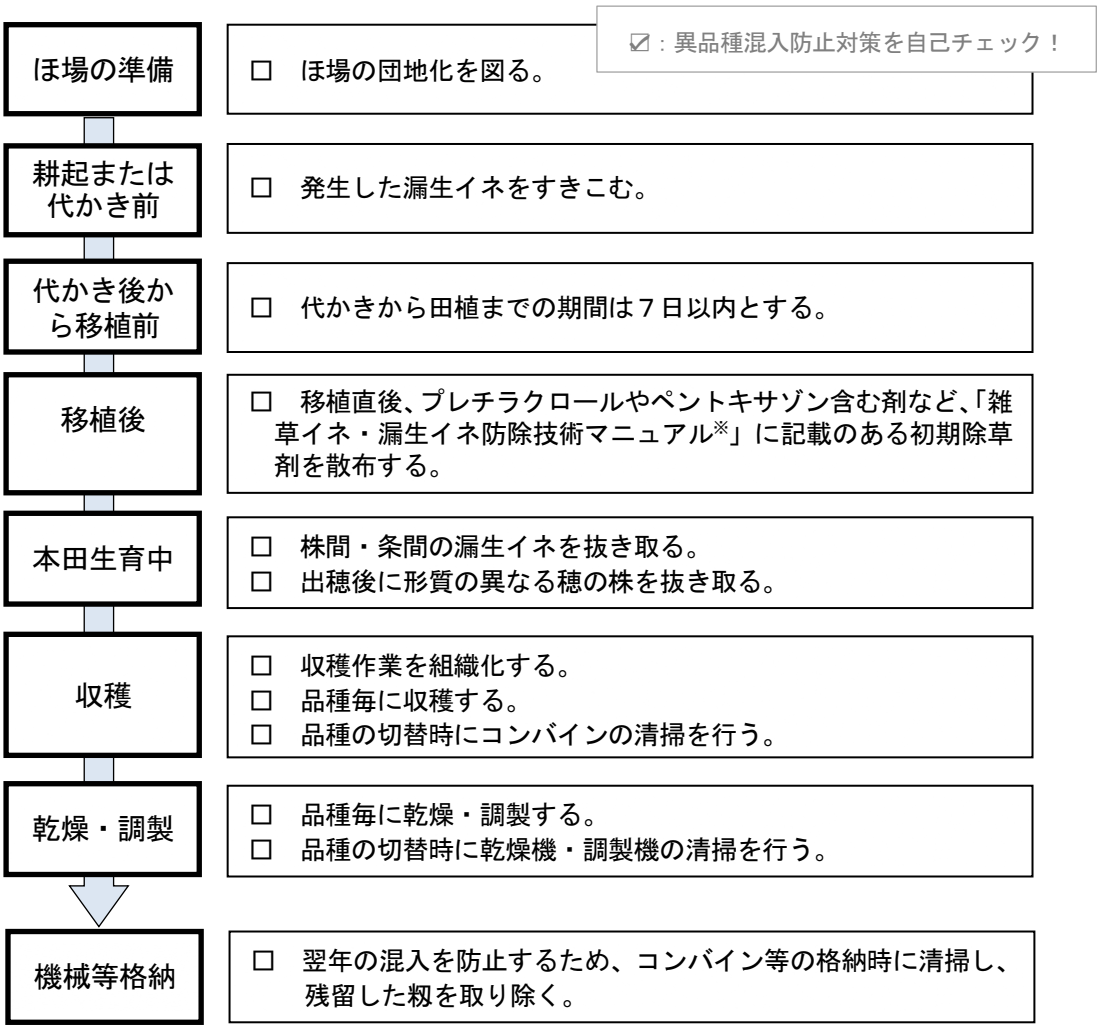


図 12　異品種混入防止対策の作業フロー

※雑草イネ・漏生イネ防除技術マニュアル　2019 年 3 月 22 日発行　農研機構